
論説

日本における混合研究法関連論文の 出版トレンド —国際比較に見るその特徴と課題—

抱井尚子¹⁾

阿部路子²⁾

要旨

本稿では、我が国における混合研究法関連論文の出版トレンドを、論文タイプ別（方法論的考察論文、経験的研究論文）、および分野別に明らかにした。論文検索には、CiNii Research、J-Stage、医中誌の3つのデータベースを用い、タイトルか抄録に「混合研究法」、「ミックス法」、「ミックスメソッド」、「ミックスドメソッド」、「mixed method」または“mixed methods”の6つのキーワードのいずれかを含む、2022年までに出版された論文を分析の対象として抽出した。比較対象として、Ivankova & Kawamura (2010) によって報告された海外の出版トレンドを用い、国内と海外のトレンドにおける類似点と相違点を検討した。そのうえで、我が国の出版トレンドの特徴と、そこから示唆される今後の課題について考察した。

キーワード：混合研究法、出版トレンド、方法論的考察論文、経験的研究論文、国際比較

1. はじめに

混合研究法（mixed methods research）は現在、さまざまな研究分野においてその利用が広がり、世界各地でも急速に普及している。しかし、その普及・発展のパターンは

1) 青山学院大学国際政治経済学部国際コミュニケーション学科

2) 青山学院大学混合研究法教育開発センター / 浜松医科大学地域家庭医療学講座

国・地域毎に若干異なっているように思われる。そのため本稿では、日本における混合研究法論文の出版トレンドの特徴を、欧米を中心とする海外の出版トレンドと比較することで明らかにし、今後我が国において当該研究アプローチが根付いて行く上での課題についても検討する。

混合研究法とは、「量的・質的研究アプローチを戦略的に統合することで、どちらか一方のメソッドのみでは知り得ない、現象に対するより深い理解を得ることを目指す第3の研究アプローチ」（抱井他, 2022, p. 94）である。1980年代を中心に展開した、量的研究者と質的研究者を分断し、不毛な論争へと追い込んだいわゆるパラダイム論争に辟易した欧米の研究者グループによって、混合研究法は35年ほど前に誕生したといえる（抱井, 2015）。

日本における混合研究法への関心は、欧米からやや遅れて、2000年以降にその高まりを見せ始めた。したがって、現時点の日本において混合研究法は、欧米ほど広く多くの分野に浸透しているとは言い難い。他方、日本語論文のデータベースを検索した際にヒットする、「混合研究法」をキーワードに含む論文や関連書籍・章の数が右肩上がりに増えているところを見ると、当該研究アプローチへの関心や利用が我が国においても分野を超えて着実に広がりつつあることがわかる。

2. 先行研究

ここではまず、Creswell & Plano Clark (2017) に依拠し、混合研究法の出版トレンドの背景にある当該アプローチ発展の歴史を概説する。その上で、英語圏を中心とする海外において混合研究法が急速に広がった2000年から10年間に着目し、その間の混合研究法関連論文出版トレンドを、Ivankova & Kawamura (2010) に依拠しながら確認する。

2.1 混合研究法発展の歴史

Creswell & Plano Clark (2017) は混合研究法の発展の歴史を、形成期、パラダイム論争期、手続き発展期（初期）、手続き発展期（拡張期）、そして省察・精緻化期の5つの段階に分けて説明している。混合研究法に関する英語論文の出版トレンドは、特に第3・第4段階の手続き発展期の初期と拡張期において急速に伸びたといえる。以下ではこれらの段階の背景にある具体的イベントについて概説する。

パラダイム論争期を経て、混合研究法が本格的にその発展の途に就いたのは、1980年代から2000年代までの第3段階「手続き発展期（初期）」といえる。1980年代の後半に入ると、研究者の関心がパラダイム論争から混合研究法の具体的な手続きのあり方に移

行し、この動きは、教育評価、社会学、ビジネスといった様々な分野において起こった。中でも顕著であったのが、教育評価の分野における当該アプローチの利用であり、教育評価研究者である Jennifer Greene と彼女の共同研究者によって1989年に出版されたデザインの類型に関する論文 (Greene et al., 1989) は、混合研究法の古典的論文として位置づけられている。

1990年代以降は手続き的議論がさらに進み、看護学研究者の Janice Morse により量的・質的データを混合する目的やタイミングを示すための表記方法が開発され (Morse, 1991)、教育心理学者の John Creswell によって混合研究法デザインの類型が開発された (Creswell, 1994)。また、この頃より、混合研究法を支える哲学的視座として、プラグマティズムまたは実用主義と呼ばれるアメリカ合衆国に起源をもつ哲学的視座が多く研究者によって支持されるようになっていった³⁾ (Tashakkori & Teddlie, 1998)。

2000年代初期以降の第4段階「手続き発展期 (拡張期)」になると、混合研究法への関心の広がりはさらに加速した。2003年には混合研究法に関する初のハンドブックである *The SAGE Handbook of Mixed Methods in the Behavioral and Social Sciences* の初版が Abbas Tashakkori と Charles Teddlie の編集により世に送り出され、2010年にはその第2版が出版された (Tashakkori & Teddlie, 2003, 2010)。さらに、2015年にはオックスフォード大学出版からも、*The Oxford Handbook of Multimethod and Mixed Methods Research Inquiry* (Hesse-Biber & Johnson, 2015) が出版され、本稿執筆中の2023年10月には、混合研究法第2世代を代表するカナダの Cheryl Poth 編集による、*The SAGE Handbook of Mixed Methods Research Design* (Poth, 2023) も新たに加わっている。こうして、現在までに出版された混合研究法に関する英語書籍は30冊を優に超えている。

2007年には、混合研究法に関する初の専門学術雑誌 *Journal of Mixed Methods Research* が創刊された。その他にも *International Journal of Multiple Research Approaches* が創刊され、混合研究法に関する方法論的論考や当該アプローチを用いた実証研究の出版トレンドの上昇に寄与したといえる。加えて、2013年には国際混合研究法学会 (Mixed Methods International Research Association : MMIRA) が設立され、創立記念大会が米国ボストン・カレッジにおいて2014年に開催されている。以来 MMIRA は隔年で本大会を開催し、本大会が開催されない年には世界中の様々な地域に広がる MMIRA の関連学会や支部が地域会議を開催している。

3) この他にも、混合研究法を支える哲学的視座として、変革のパラダイム、批判的实在論、弁証法的多元主義などがある。

また、米国においては、国立衛生研究所（NIH）、国立科学財団（NSF）、国立研究機構（NRC）といった研究助成金交付機関が混合研究法を普及するためのセミナーやワークショップを開催し始めている。そして、助成金申請者と査読者のために、混合研究法のベストプラクティスというガイドラインの初版が2011年に NIH より出版されている（Creswell et al., 2011）。この流れに乗って、混合研究法の利用が、特に保健医療研究分野を中心に急速に増えていったといえる。

近年においては、2019年にアメリカ心理学会が発行する論文執筆マニュアル第7版に、質的研究と混合研究法の執筆基準が初めて加えられている（American Psychological Association, 2020；Levitt, 2020）。これを機に、ポスト実証主義が優勢であった心理学の分野においても、質的研究と混合研究法の利用が急速に広がることが予想される。

2.2 海外における混合研究法の出版トレンド（2000～2009）

Ivankova & Kawamura (2010) は、*The SAGE Handbook of Mixed Methods in the Behavioral and Social Sciences* (2nd ed.) の中で、2000年から約10年間の間に英語で発表された混合研究法の方法論的考察論文と経験的研究論文⁴⁾の出版トレンドを報告している。この期間は、Creswell & Plano Clark (2017) が特定した混合研究法の「手続き発展期」の初期と拡張期の過渡期にあたる。

Ivankova らによって検索に用いられたデータベースは PubMed、ERIC、PsycInfo、Academic One File、そして Academic Search Premier の5種類と、*Journal of Mixed Methods Research* および *International Journal of Multiple Research Approaches* の2種類の学術雑誌であった。研究者らは、2000年1月から2009年4月までの期間において英語で出版された混合研究法の方法論的考察論文と混合研究法を用いた経験的研究論文を抽出している。その際、意識的に当該研究アプローチを使用している論文のみを分析対象とする目的で、検索基準を、タイトルまたはアブストラクトに“mixed method” “mixed-method” または “mixed methods” を含むものとしている。さらに、経験的研究論文については、*Journal of Mixed Methods Research* 創刊号で示された混合研究法の定義（Tashakkori & Creswell, 2007）に従い、1つの論文の中に量的・質的研究の両方の要素をもつもののみを含めている。

以下では、Ivankova & Kawamura (2010) が明らかにした、海外における混合研究

4) 日本混合研究法学会では、混合研究法を用いた経験的研究（英語の加算名詞にあたる mixed methods studies）を「混合型研究」と呼んでいる。これを「混合法研究」と呼ばない理由は、混合法という用語を文献検索に使用した際に、化学工学系の混合法研究の文献も抽出されてしまうためである。

法の方法論的考察論文と経験的研究論文それぞれについての出版トレンドを示す。

2.2.1 海外における混合研究法の方法論的考察論文出版トレンド

上述した検索基準と方法を用いて、Ivankova らが2000年から2009年の間に出版された方法論的考察論文を調べた結果、合計113本の査読済み方法論的考察論文が出版されていることが明らかとなった (Ivankova & Kawamura, 2010)。この結果は、混合研究法に関する方法論的考察論文の出版が2000年以降着実に伸びていることを示すこととなったが、その背景には2003年の *The SAGE Handbook of Mixed Methods in the Behavioral and Social Sciences* 初版の出版があると研究者らは推察している。また、分野別では、医学、看護学、リハビリテーションをはじめとする保健医療関連分野が半分近くを占め (45%)、教育学 (15%)、社会学 (11%)、心理学 (9%)、そしてその他の社会科学系の分野がこれを追っていることが報告されている。

2.2.2 海外における混合研究法の経験的研究論文出版トレンド

Ivankova & Kawamura (2010) は、混合研究法を用いた経験的研究論文の出版トレンドについても、方法論的考察論文と同様の検索方法を用いて調査している。最初に2000件の論文を抽出し、さらにこれらを2000年の年初から2008年の年末までの期間に査読付きジャーナルに出版された混合型研究論文に絞り込み、そこからさらに重複論文や、質的・量的研究の要素が1つの論文に含まれていないものを除外している。結果として合計689本の経験的研究論文を抽出している。分析の結果、経験的研究論文の出版トレンドには方法論的考察論文と類似したパターンがみられ、論文全体の49%が保健医療関連分野のものであり、これに教育学 (15%)、社会学 (12%)、心理学 (9%)、そしてその他の社会科学系分野が続くことが報告されている。また、論文出版数を第一著者の国で比較した結果、米国が群を抜いてリードしており、出版された経験的研究論文全体の半数を占めていた。米国に次いで二番目に多くの経験的研究論文を出版していた英国でさえ米国の半数以下にとどまっており、カナダ、オーストラリアがこれを追う形となっていた。このように、論文の著者は圧倒的に米国をはじめとする英語圏の研究者が占めていることが明らかになっている。

2.3 日本における混合研究法への関心の高まり

我が国における混合研究法への関心は、欧米から10余年遅れて高まり始めたといえよう。前述したように、世界では欧米を中心に1980年代の後半から1990年代を通して混合研究法の手続きのあり方について活発な議論が行われ、教育評価研究者の Greene、社

会心理学者の Tashakkori と Teddlie、教育心理学者の Creswell、看護学研究者の Morse をはじめとする執筆者によって、様々な分野から関連著書が出版された。これらの著者らは、各々に、混合研究法に対する独自の解釈および解説を展開している。

一方日本においては、2000年以降、次々と混合研究法の英語書籍が翻訳されていった。中でも Creswell による書籍の邦訳がもっとも早く、そしてもっとも多く出版されたことから、同氏による混合研究法の解釈とその解説が我が国の研究者の間では広く知られているといえよう⁵⁾。そのような中、2015年には拙著『混合研究法入門—質と量による統合のアート』（医学書院）が、海外の専門家の邦訳書ではなく、日本語による初の混合研究法オリジナル書籍として上梓された。さらにこの翌年の2016年には、以下で触れる前年に開催された MMIRA アジア地域会議での基調講演やワークショップの内容をまとめた書籍⁶⁾が日本語で出版され、2021年には混合研究法の論文の読み方と書き方を「宝探しゲーム」になぞらえて解説したガイド本⁷⁾が日本語によるオリジナル書籍にさらに加わった。また、日本において混合研究法を推進する目的で、2015年には混合研究法専門学術団体として我が国初となる日本混合研究法学会（Japan Society for Mixed Methods Research : JSMMR）が設立され、9月には創立記念学術大会を MMIRA とともにアジア地域会議として共同開催している。そして、それ以降、学会主催のセミナーやワークショップを通して、JSMMR は混合研究法の日本語による拡散に努めている。これら一連の出来事により、我が国における混合研究法は、2000年以降現在までの期間において、「手続き発展期」の初期から拡張期への移行を経験しているといえよう。

5) 2023年現在、日本で出版された混合研究法の邦訳書には、John Creswell による *Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches* の初版訳（2003/2007、操華子・森岡崇共訳）、Creswell と彼の教え子である Vicki Plano Clark との共著である *Designing and Conducting Mixed Methods Research* の初版本訳（2007/2010、大谷順子訳）、医療分野の多忙な研究者のために混合研究法の重要ポイントを Creswell が簡潔にまとめた *A Concise Introduction to Mixed Methods Research* の初版本訳（2015/2017、抱井尚子訳）、混合研究法初のハンドブック編著者である Teddlie と Tashakkori による *Foundations of Mixed Methods Research: Integrating Quantitative and Qualitative Approaches in the Social and Behavioral Sciences* の初版本訳（2009/2017、土屋敦・八田太一・藤田みさお共訳）などがある。

6) 抱井尚子・成田慶一（編）（2016）. 混合研究法への誘い—質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ 遠見書房.

7) フェッターズ, M. D.・抱井尚子（編）（2021）. 混合研究法の手引—トレジャーハントで学ぶ研究デザインから論文の書き方まで 遠見書房.

3. 目的

本稿では、混合研究法の「手続き発展期」初期から拡張期（Creswell & Plano Clark, 2017）に移行しつつある我が国の混合研究法関連論文出版トレンドを明らかにする。その際、日本に先駆けて当該研究アプローチの「手続き発展期」の初期から拡張期への移行を経験した英語圏を中心とする海外の出版トレンド（Ivankova & Kawamura, 2010）との比較から、日本と海外の両者にみられる混合研究法出版トレンドの類似点・相違点を整理する。この作業を通じて、我が国における混合研究法手続き発展期の特徴を明らかにするとともに、今後日本において混合研究法が根付いていく上での課題について検討する。

4. 方法

4.1 分析対象とした論文の検索手順

日本において2022年12月末までに出版された論文の中で、混合研究法に関する方法的考察論文と混合研究法を用いた経験的研究論文を含めた。文献検索の対象期間に開始点を設定しなかった理由は、我が国において混合研究法関連論文がいつ頃から出版され始めたかについて確認するためである。

文献検索は2022年9月～2023年1月に実施した。検索には CiNii Research、J-Stage、医中誌の3つのデータベースを用い、タイトルか抄録に「混合研究法」、「ミックス法」、「ミックスメソッド」、「ミックスドメソッド」、「mixed method」、「mixed methods」の6つのキーワードのいずれかが含まれる論文を抽出した。その際、CiNii Researchは「国内紀要」を指定し、J-Stageはジャーナル、医学・保健衛生系／学際科学系／人文社会科学系の分野とした。医中誌については会議録を除外した。その上で、重複、我々の検作用語が異なる意味で用いられている化学工学、物理学、統計学といった分野の論文、博士論文のアブストラクトなど、合計19件の検索結果を除外した。結果として、合計415件の論文を分析の対象とした。その内、英語で執筆された論文は148件あった。

5. 結果

以下に、日本において2022年までに出版された混合研究法関連論文415件について、論文出版開始時期と出版論文件数の経年推移、混合研究法関連論文のタイプ別内訳、各

論文タイプにおける分野別出版割合を示す。

5.1 論文出版開始時期と出版論文件数の経年推移

今回の検索で抽出された415件の混合研究法関連論文の中で、もっとも早期のものは2005年に出版された看護学分野の論文であった。ただしこの論文は、Janice Morseら米国の研究者による混合研究法の解説論文の邦訳（モース他，2005）であり、日本の研究者によるものではない。そして、翌年2006年に、日本の研究者による学術雑誌論文が教育学の分野から出版されている（中村ら，2006）。なお、この頃は、“mixed methods research”という英語表記が用いられ、「混合研究法」という表記は使用されていない。そして、2011年あたりになると「混合研究法」という漢字表記が使用され始めている。これは、2010年に出版されたCreswell & Plano Clarkによる*Designing and Conducting Mixed Methods Research*初版の邦訳書（大谷順子訳）で使用されたmixed methods researchの訳語であり、日本では次第にこの呼称が根付いて行った。

以下に、2005年から2022年における我が国の混合研究法関連論文出版件数の経年推移を示す（Figure 1）。年によって多少の増減があるものの、論文件数が着実に伸びていることがこの図から覗える。

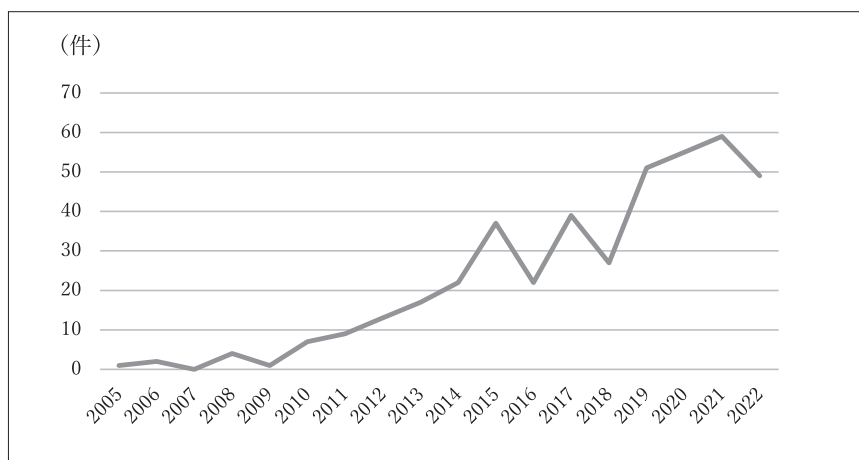


Figure 1 日本における混合研究法関連論文出版件数の経年推移（2005～2022）

5.2 混合研究法関連論文のタイプ別内訳

Table 1は、2005年から2022年末までに日本で出版された混合研究法関連論文（n=415）のタイプ別出版割合である。この表から、混合研究法関連論文の圧倒的多数が経験的研究論文（n=302）であり、方法論的考察論文（n=96）はその3分の1程度であることがわかる。論文の中には、文献レビューと書評もごく僅かではあるが含まれていることも

わかる。

Table 1 論文タイプ別出版割合

経験的研究	方法論的考察	文献レビュー	書評	合計
302	96	12	5	415
73%	23%	3%	1%	100%

経験的研究論文と方法論的考察論文それぞれの日本国内の出版トレンドと、Ivankova & Kawamura (2010) による海外の出版トレンドを比較した結果を Figure 2に示す。比較対象となる検索期間は、日本が2005年から2022年の18年間で海外が2000年から2009年の10年間であるが、海外は複数の国々や地域の研究者による論文を含むのに対し、日本については国内の雑誌に掲載された論文のみを対象にしているため、検索期間を同一にする調整は取ってしなかった。海外では方法論的考察論文の件数が経験的研究論文の約6分の1であるのに対し、日本ではこの比率が約3分の1であった。論文検索の対象となる期間が、海外と日本国内とでは異なるため、両者の単純比較はできないものの、海外と比べて我が国においては混合研究法関連論文における方法論的考察論文が占める割合が比較的高いことがわかる。

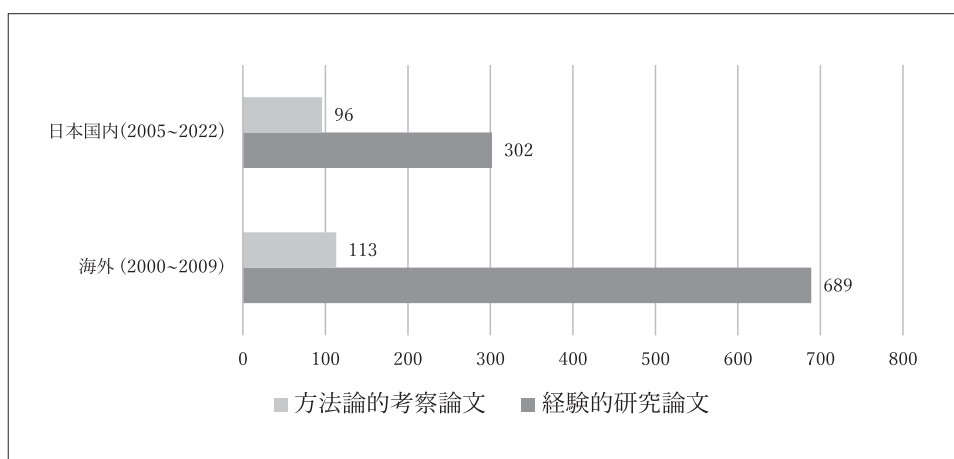


Figure 2 日本国内と海外の論文タイプ別出版数の比較

5.3 各論文タイプにおける分野別出版割合

次に、論文タイプ別に日本においてどのような分野が混合研究法関連論文をどの程度出版しているのかをまとめた。さらに、2005年から2022年までの我が国における混合研究法出版トレンドを、Ivankova & Kawamura (2010) によって明らかにされた2000年から10年間の海外における混合研究法手続き発展期（初期から拡張期への移行期）の出版トレンドと比較した。

5.3.1 方法論的考察論文における分野別出版割合

方法論的考察論文 (Table 2) については、学際的な方法論専門雑誌に掲載された論文の割合がもっとも高く、全体の30.2%を占めていた。2022年に創刊号が出版された日本混合研究法学会の機関誌『混合研究法 (Annals of Mixed Methods Research)』⁸⁾に掲載された論文がその中に多く含まれていた。学際的な方法論専門雑誌に僅差で続くのが29.2%の看護学/助産学の雑誌に掲載された論文であった。このことは、日本において看護学が他の分野よりも混合研究法の方法論的考察に高い関心を有していることを示唆する。社会科学系でもっとも多くの方法論的考察論文を出版している分野は教育学の8.3%であったが、看護学/助産学との間には20ポイント以上の開きがあることが確認された。

Table 2 方法論的考察論文の分野別出版割合

医学	看護学/ 助産学	高齢者介護/ リハビリ テーション	教育学	社会学	心理学	経済学/ 経営学	政治学	方法論 (学際的)	合計
12	28	5	8	4	4	5	1	29	96
12.5%	29.2%	5.2%	8.3%	4.2%	4.2%	5.2%	1.0%	30.2%	100%

注1. 「方法論」(学際的)は学際的な分野の研究者による方法論的考察論文が掲載された専門雑誌を指す。

方法論的考察論文の分野別出版割合を日本国内と海外 (Ivankova & Kawamura, 2010) とで比較した結果を Figure 3に示す。この図から、海外および日本において、もっとも多くの方法論的考察論文を排出しているのは保健医療分野であることがわかる。一方、日本国内において2番目に多くの方法論的考察論文を排出している分野は学際的な「方法論」の分野となっている。これは、分野横断的な方法論の議論を特定のディシプリンに紐付けずに学際的分野として独立させたカテゴリーである。Ivankova & Kawamura (2010) にはこのような分類はないため、この点についても2つの出版トレンドの比較には注意が必要である。

8) <http://www.jsmmr.org/journal.html>

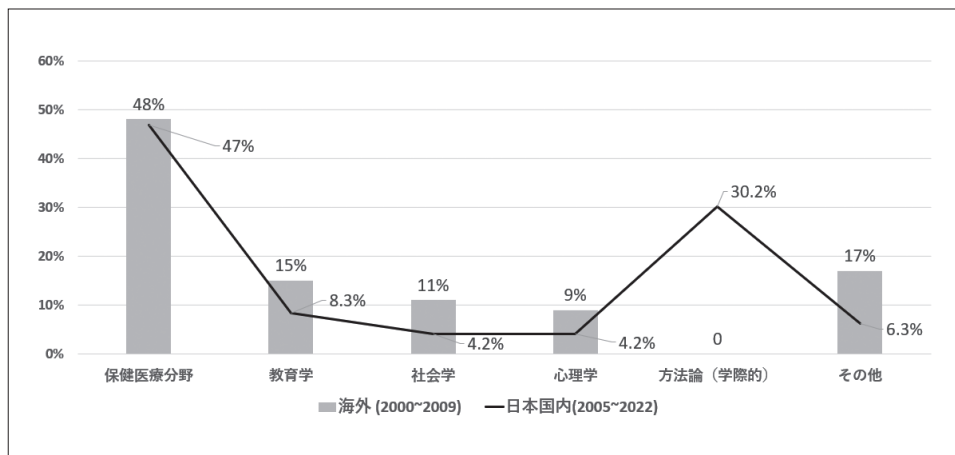


Figure 3 日本国内と海外における方法論的考察論文の分野別出版割合の比較

- 注1. 海外データの「その他」には、コミュニケーション研究、社会福祉学、図書館学、政治学、経営学、女性学が含まれる。
 注2. 日本国内のデータの「その他」には、経済学/経営学、政治学が含まれる。

5.2.2 経験的研究論文における分野別出版割合

経験的研究論文 (Table 3) については、単一の分野としては教育学がもっとも多くの論文を出版しており、全体の31.5%を占めていた。次に、医学と看護学/助産学がそれぞれ21.9%、16.6%と続くが、医学、看護学/助産学、高齢者介護/リハビリテーションを保健医療分野として一括りにした場合、方法論的考察論文と同様、経験的研究論文についても、この分野がもっとも高い出版割合 (45.7%) を有することが明らかとなった。

Table 3 経験的研究論文の分野別出版割合

医学	看護学/ 助産学	高齢者介護/ リハビリ テーション	教育学	社会学	心理学	経済学/ 経営学	その他	合計
66	50	22	95	28	11	19	11	302
21.9%	16.6%	7.3%	31.5%	9.3%	3.6%	6.3%	3.60%	100%

- 注1. 「その他」にはスポーツ科学、ロボット科学、都市計画、建築、農業、地域研究が含まれる。

経験的研究論文の分野別出版割合を日本国内と海外 (Ivankova & Kawamura, 2010) とで比較した結果を Figure 4に示す。この図から、海外 (49%) でも日本 (45.7%) でも、もっとも多くの経験的研究論文を排出しているのは保健医療分野であることがわかる。ただし、日本国内の保健医療分野を一括りにせずに、医学、看護学/助産学、高齢者介護/リハビリテーションの3つに分けた場合、それぞれのもつ出版割合はもっとも高いものでも医学の21.9%となり、単独の分野としてもっとも多くの経験的研究論文を出版

しているのは教育学（31.5%）であることがわかる。

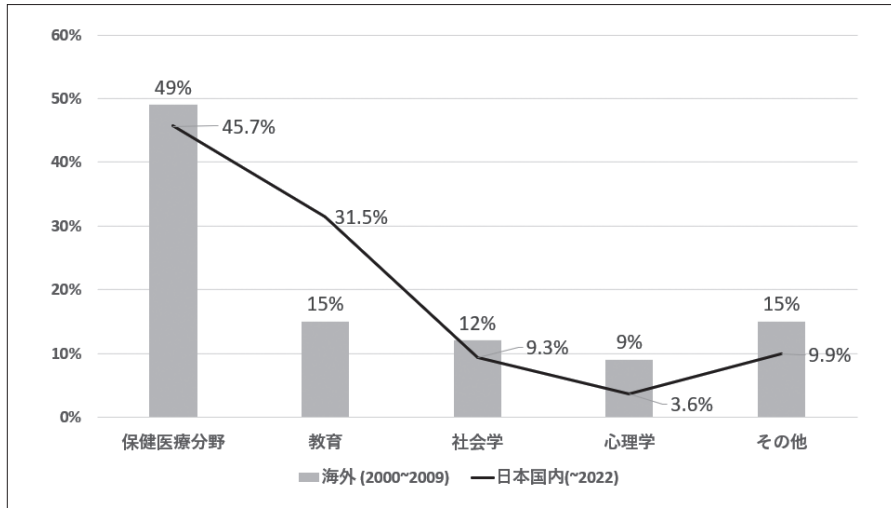


Figure 4 日本国内と海外における経験的研究論文の分野別出版割合の比較

6. 考察

CiNii Research、J-Stage、医中誌の3つのデータベースを用い、2022年末までに出版され、タイトルか抄録に「混合研究法」、「ミックス法」、「ミックスメソッド」、「ミックスドメソッド」、「mixed method,」「mixed methods」の6つのキーワードのいずれかが含まれる論文を抽出した結果、我が国における混合研究法関連論文出版トレンドがもついくつかの特徴が明らかになった。以下ではこれらの出版トレンドの特徴と、そこから示唆される今後の課題について検討する。

6.1 混合研究法関連論文出版の経年推移

今回の調査から、日本において混合研究法への関心が高まり始めたのは2000年代初期であることが明らかになった。そして、このトレンドは、科学研究費助成事業のデータベース (<https://kaken.nii.ac.jp/>) を検索すると抽出される科学研究助成金を獲得した混合研究法関連プロジェクト件数の推移が示す傾向とも一致する⁹⁾。その後、混合研究

9) 科学研究費助成事業データベースを「ミックスメソッド」「ミックスドメソッド」「混合研究法」の3つの用語で検索すると、「ミックスドメソッド」の検索用語で2001年に1件、「混合研究法」で2005年に1件、そして「ミックスメソッド」で2007年に1件が抽出される。

法関連論文は着実にその数を増やし、2021年には2005年以来もっとも多い59件に達している。2022年にその数が減少している原因は不明であるが、これまでの経年推移を見ても年によって多少の増減はあるため、2023年以降の出版数も増えて行くことが予想される。

6.2 方法論的考察論文と経験的研究論文の出版割合

方法論的考察論文と経験的研究論文の出版数を比較した場合、海外と日本ともに、その割合は圧倒的に経験的研究論文が多いことがわかった。Ivankova & Kawamura (2010) による海外における混合研究法出版トレンドは、2000年からの約10年間に於いて方法論的考察論文の約6倍の経験的研究論文が出版されていたことを示している。日本においても、方法論的考察論文の出版数は経験的研究論文の3分の1程度である。しかしながら、日本の出版トレンドの特徴として、両タイプの論文出版数の割合の差に海外ほどの開きがないことが挙げられる。このことから、我が国では混合研究法の方法論的議論が比較的活発であるといえる。とはいえ、方法論的議論は経験的研究で活用されてこそ意味があるという面もあり、また、経験的研究論文の数が増えていかないと方法論的議論も活性化しない。したがって、今後経験的研究論文の数がさらに増えていくことが期待される。

6.3 分野別混合研究法関連論文の出版割合

さらに、分野別に混合研究法関連論文の方法論的考察論文および経験的研究論文の出版割合を比べてみると、論文タイプに関わらず、海外と日本のどちらも、もっとも論文の出版割合が高いのが保健医療分野、次いで教育学、社会学、心理学、そしてその他の分野と続く、類似したパターンをもつことが明らかになった。特に保健医療分野については、海外も日本も両タイプの論文においてその出版論文の割合は全体のほぼ半分を占める。このことから、混合研究法にもっとも関心を寄せている分野は、海外・日本ともに医学や看護学を中心とする保健医療分野であることが示唆される。その背景には、保健医療分野が人間の生物学的、心理的、社会的側面を包括的に扱う分野 (Engel, 1977) であることから、量的・質的研究アプローチから多面的に現象に迫る混合研究法とは相性が良いということがある。その他にも、例えば米国では、2000年以降に保健医療分野の研究において混合研究法の利用を NIH が推奨してきたことも挙げられる。日本の場合、このような研究助成金交付機関によるイニシアチブの存在は管見の限り認識していないが、著者らが知るところだけでも、静岡県とミシガン大学による静岡家庭医養成プログ

ラム (SFM) といった国際共同事業¹⁰⁾や、日本看護科学学会をはじめとする学術団体主催の講演やセミナー¹¹⁾、看護系雑誌¹²⁾を通して、保健医療分野の研究者の間で混合研究法への関心が高まって行った可能性がある。また、2022年4月に創刊された日本混合研究法学会の機関雑誌『混合研究法』(*Annals of Mixed Methods Research*)が、特に方法論的考察論文の受け皿となっていることも、今回の文献検索より明らかになった。

一方、我が国における経験的研究論文の出版トレンドに関しては、分野別出版割合の統計処理方法を変えることによって別の景色が見えてくる点についても指摘したい。今回、Ivankova & Kawamura (2010) との比較のために保健医療分野として一括りにした医学、看護学/助産学、高齢者介護/リハビリテーションの各分野をそれぞれ単独の分野として見た場合、我が国においてもっとも多くの混合研究法を用いた経験的研究論文を排出しているのは教育学の分野であり、全体の31.5%を占めることが明らかになった。海外では教育学分野の経験的研究論文の割合は全体の15%に留まっていることを鑑みると、我が国では教育学研究において積極的に混合研究法が用いられていることがわかる。ただし、方法論的考察論文については、海外の教育学分野の論文出版割合が全体の15%を占めるのに対し、日本は全体の8.3%にとどまっていることから、日本の教育学分野における混合研究法の方法論に対する議論は海外ほど活発ではないことが示唆される。混合研究法の定義や方法論については、研究者の認識論的立ち位置や手続きに対する考え方の違いによって多様な見解が存在するため、海外の経験的研究論文では、誰のどの定義にしたがって研究を進めるのかが読者に明確になるよう、論文中に方法論に関する言及を引用文献とともに示すことが多い。一方、今回文献検索で抽出された日本の教育分野の経験的研究論文中にはそのような言及や混合研究法に関する文献の引用があまり見られず、混合研究法が所与のものとして暗黙の了解のもとに使われているという印象を受けた。混合研究法をメソッドとして捉えるのか、はたまたメソドロロジーと

10) 本プログラムの講師を務めた、医師でもあるマイク・D・フェターズ博士は、*Journal of Mixed Methods Research* の共同編集委員長を2015から2023まで務め、その間、本プログラムを通して多くの医療関係者に混合研究法のワークショップやセミナーを提供した。プログラムの詳細については下記の URL から参照されたい。

<https://medicine.umich.edu/dept/jfhp/smarter-fm-project/smarter-fm-Japanese/about/grant-history>

11) 2015年3月7日に日本看護科学学会 (JANS) 主催の混合研究法セミナーが開催されている (<https://www.jans.or.jp/modules/seminar/>)。管見の限り、これは JANS が混合研究法をテーマとして扱った初めてのセミナーである。

12) 雑誌『看護研究』(医学書院)に本稿第一著者による混合研究法の連載記事が掲載され(連載期間:2015年2月~同年12月)、連載終了後にこれを1冊の本にまとめた『混合研究法入門―質と量による統合のアート』が出版された。

して捉えるのかの違いがここに現れているのかもしれない。

ここで、保健医療分野をさらに細かく分けて眺めた際に、看護/助産学に教育学と逆の傾向があることにも言及しておきたい。看護学/助産学分野では、方法論的考察論文の割合の29.2%に対して経験的研究論文が16.6%であり、経験的研究論文の割合が伸びていないことも課題として考えられる。このような分野については、研究実践における混合研究法の活用を支援する動きも、今後求められるのではないだろうか¹³⁾。

さらに、方法論的考察論文と経験的研究論文の両方において、現在は全体の10%にも満たない出版割合を示す心理学だが、2020年に出されたアメリカ心理学会（American Psychological Association: APA）の論文執筆マニュアル第7版（American Psychological Association, 2020）に質的研究と混合研究法の執筆基準が加わったことから、これらの研究アプローチによる経験的研究論文が今後増えていくことが推察される。日本においてもその兆候は既に見え始め、例えば2023年3月には「APA マニュアルにみる質的研究の評価の視点と研究の最前線」というテーマで社会心理学会方法論セミナーが実施され、その中で混合研究法も紹介されている¹⁴⁾。

6.4 混合研究法が日本に根付いていく上での課題

保健医療分野においてもっとも高い関心を集めている混合研究法だが、アメリカ心理学会による論文執筆マニュアルに混合研究法が加えられたことから、現在それほど積極的に論文を排出していない分野からも今後多くの混合研究法関連論文が出版されることが予想される。複数の分野の研究者がそれぞれの分野で優勢な認識論的立場から混合研究法を用いることで、経験的研究における混合研究法の手続きやデザインのあり方がさらに多様化していくことが考えられる。これに伴い、混合研究法の方法論的議論も、これまで以上に活発になって行くものと思われる。

混合研究法の議論を活発にするためには、そのための共通の言語が必要となる。特に、分野を横断して行う議論については、用語の意味や概念の定義について、共通認識をもつことが重要となってくるだろう。英語圏では、これまで、MMIRA やミシガン大学の混合研究法プログラム¹⁵⁾が中心となり、混合研究法に関するコミュニケーションを容易

13) 支援の一例として、科学研究費の助成を受けた、本稿第一著者が研究代表を務める「看護研究者のための混合研究法eラーニング開発」がある（科学研究費補助金 基盤研究（B）課題番号：20H03966）。

14) セミナーの詳細については以下を参照されたい。

https://www.socialpsychology.jp/seminar/seminar_230313.html

15) ミシガン大学混合研究法プログラムの詳細については、以下を参照されたい。

にするための用語や概念の整理を行ってきた。日本語についても、ある程度用語や概念の共通認識を構築する必要があると考える。例えば、今回の文献検索においても、我々は、日本語だけでも「混合研究法」、「ミックス法」、「ミックスメソッド」、「ミックスドメソッド」と、4つも異なるキーワードを使用しなければならなかった。同一の概念を表す用語が複数存在する場合、文献検索を煩雑にし、情報収集を困難にしてしまう可能性がある。抽出された文献の中で混合研究法がどのように表記されているかに目を向けると、2000年代初期には日本語の中に英語で“mixed methods”や“mixed methods research”の英語表記が使われており、その後、2011年以降「混合研究法」という漢字表記が使用されるようになっていく。科学研究費助成事業データベースでも、この約20年間で「混合研究法」の用語で採択された課題総数の方が、「ミックスメソッド」や「ミックスドメソッド」に比べ圧倒的に多い（Kakai, 2023）。そのような中、2023年2月に出版された日本語版 APA 論文作成マニュアルでは、表記がミックスメソッドに戻っている。日本で最初に混合研究法関連論文が出現した2005年から20年近く経つ今になっても用語がなかなか収斂していないことがわかる。用語問題は今後の課題として、当分の間我々の頭を悩ませることとなろう。

さらに、筆者らが2020年より実施している科学研究費の助成を受けたプロジェクトの一環として実施した海外の看護学研究者へのインタビュー調査からも、混合研究法に対する考え方は決して収斂しておらず、その手続のあり方も研究者によって多様であることが明らかとなっている。混合研究法に対し様々な捉え方があること自体は、この研究アプローチを拡張するものとして肯定的に捉えることもできる。多様な考えからさらに新しい革新的な研究アプローチが生まれる可能性もある。一方で、その多様な考え方が研究コミュニティの分断や、他者とのコミュニケーションを阻むことになっては本末転倒である。今後、混合研究法が我が国に根付いて行く上では、何よりもまず、コミュニケーションの共通基盤としての用語や概念の整理、そして論文を執筆する上で自身が用いる混合研究法の定義を明らかにする重要性の認識が不可欠となろう。

7. おわりに

本稿では、我が国における混合研究法関連論文の2005年から2022年までの出版トレンドを明らかにし、海外における出版トレンドとの比較を通してその特徴を明らかにした。その結果、混合研究法「手続き発展期」の初期から拡張期への移行期といえるここ約20

年間の我が国の出版トレンドは、比較対象とした海外の2000年から2009年の出版トレンドと多くの共通点をもつことがわかった。さらに、共通点だけではなく、日本独自の出版トレンドの特徴があることも明らかになった。

今回の文献調査の限界としては、第一に、使用したデータベースと検索方法では抽出できない雑誌に掲載された論文については分析に含まれていないことが挙げられる。また、日本から国際ジャーナルに掲載された論文を分析対象に含めた場合には、出版数や分野別の比率は異なってくることが予想される。第二に海外の出版トレンドとの比較における厳密性の問題が挙げられる。例えば、Ivankova & Kawamura (2010) の調査では査読済みの論文だけを対象にし、経験的研究論文については *Journal of Mixed Methods Research* 創刊号で示された混合研究法の定義 (Tashakkori & Creswell, 2007) に当てはまらないものについては除外している。一方、日本の論文の検索に際してはこれらの条件は設けていない。今後は、上述の課題点についてもさらに慎重に検討した上で、調査を進める必要がある。

研究助成

本調査は、下記の研究助成を受けて行いました。

令和2年度～令和6年度 科学研究費補助金 基盤研究 (B) 課題番号：20H03966

(研究代表者：抱井尚子)

引用文献

- American Psychological Association. (2020). *Publication manual of the American Psychological Association* (7th ed.). American Psychological Association. <https://doi.org/10.1037/0000165-000>
- Creswell, J. W. (1994). *Research design: Qualitative and quantitative approaches* (1st ed.). Sage.
- Creswell, J. W. (2003). *Research design: Qualitative, quantitative, and mixed methods approaches* (2nd ed.). Sage. (クレスウェル, J. W. 操華子・森岡崇. (2007). 研究デザイン: 質的・量的・そしてミックス法. 日本看護協会出版会)
- Creswell, J. W. (2014). *A concise introduction to mixed methods research* (1st ed.). Sage. (クレスウェル, J. W. 抱井尚子. (2017). 早わかり混合研究法. ナカニシヤ出版)
- Creswell, J. W., A. C. Klassen, V. L. Plano Clark, & Smith, K. C. (2011). *Best practices for mixed methods research in the health sciences*. Office of Behavioral and Social Sciences Research, National Institutes of Health.
- Creswell, J. W., & Plano Clark, V. L. (2007). *Designing and conducting mixed methods research* (1st ed.). Sage. (クレスウェル, J. W. & プラノ クラーク, V. L. 大谷順子. (2010). 人間科学のための混合研究法: 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン. 北大路書房)
- Creswell, J. W., & Plano Clark, V. L. (2017). *Designing and conducting mixed methods research* (3rd ed.). Sage.
- Engel, G. L. (1977). The need for a new medical model: A challenge for biomedicine. *Science*, 196 (4286), 129-136. <https://doi.org/10.1126/science.847460>
- Greene, J. C., Caracelli, V. J., & Graham, W. F. (1989). Toward a conceptual framework for

- mixed-method evaluation designs. *Educational Evaluation and Policy Analysis*, 11(3), 255-274. <https://doi.org/10.3102/01623737011003255>
- Hesse-Biber, S. N., & Johnson, R. B. (Eds.). (2015). *The Oxford handbook of multimethod and mixed methods research inquiry*. Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780199933624.001.0001>
- Ivankova, N. & Kawamura, Y. (2010). Emerging trends in the utilization of integrated designs in the social, behavioral, and health sciences. In A. M. Tashakkori, & C. B. Teddlie (Eds.), *SAGE handbook of mixed methods in social & behavioral research* (2nd ed.) (pp.581-611). Sage. <https://methods.sagepub.com/book/sage-handbook-of-mixed-methods-social-behavioral-research-2e/n23.xml>
- Kakai, H. (2023). *The prevalence and challenges of mixed methods in Japan: Focusing on the field of nursing* [Webinar]. Mixed Methods International Research Association.
- 抱井尚子 (2015). 混合研究法入門：質と量による統合のアート. 医学書院.
- 抱井尚子, 八田太一, 阿部路子, 大河原知嘉子, 眞壁幸子, 福田美和子, 野崎真奈美, 亀井智子 (2022). 混合研究法の認知度・活用状況と研究実践上の課題：看護学研究者を対象とする実態調査から. *Aoyama Journal of International Studies*, 9, 93-121.
- Levitt, H. M. (2020). *Reporting qualitative research in psychology: How to meet APA style journal article reporting standards*. American Psychological Association.
- Lockheed, M. (2006). Science-based self evaluation of learning at the World Bank. *CICE Hiroshima University, Journal of International Cooperation in Education*, 9(1), 45-57.
- Morse, J. M. (1991). Approaches to qualitative-quantitative methodological triangulation. *Nursing Research*, 40(2), 120-123. <https://doi.org/10.1097/00006199-199103000-00014>
- モース, J. M., ニエハウス, L., & ウルフ, R. R. (2005). 結果の信頼性を高めるためのトライアンギュレーション 複数の理論・手法・リソースを組み合わせる研究手法. 一看護研究におけるミックスメソッドの利用 [解説 / 特集]. *インターナショナルナーシングレビュー*, 28(2), 61-66.
- 中村高康, 片山悠樹, 西田亜希子, 藤原翔. (2006). 学校社会学における Mixed Methods Research の可能性：高校生の進路に関する3年間継続調査への適用. *大阪大学教育学年報*, 11, 69-91.
- Poth, C. N. (2023). *The SAGE handbook of mixed methods research design*. Sage.
- Tashakkori, A., & Creswell, J. W. (2007). The new era of mixed methods. *Journal of Mixed Methods Research*, 1(1), 3-7. <https://doi.org/10.1177/2345678906293042>
- Tashakkori, A., & Teddlie, C. (1998). *Mixed methodology: Combining qualitative and quantitative approaches*. Sage.
- Tashakkori, A., & Teddlie, C. (2003). *The SAGE handbook of mixed methods in the behavioral and social sciences (1st ed.)*. Sage.
- Tashakkori, A., & Teddlie, C. (2010). *The SAGE handbook of mixed methods in the behavioral and social sciences (2nd ed.)*. Sage. <https://doi.org/10.4135/9781506335193>